

林業事業体を主体としたシカ管理体制の構築へ向けて

増えるシカと衰退する森林

近年、急激に個体数が増加したシカ。夜の牧草地や昼間の林道などで、シカを見かけることがあります【写真1】。このようにシカが増えた地域では、苗木の被害や樹皮はぎといった林業被害が生じたり、下層植生がほとんど食べ尽くされて土壌が流出したりするなど、森林生態系への影響が懸念されています【写真2】。

これまでシカによる被害対策としては、主に防護柵設置などの物理的防除や忌避剤散布などの化学的防除が実施されてきましたが、生息密度が高くなると防ぎきれなくなります。また、広大な森林の全てを物理的防除で守ることはできません。そのため、捕獲によるシカの個体数管理と組み合わせた被害対策の実施が重要と考えられます。

しかし、捕獲従事者が全国的に減少・高齢化している中で、集落から遠く離れた森林は林道がなくアクセスの悪い地域も多いため、対策が遅れているのが現状です。深刻化していくシカ問題。誰がどのようにに解決すればよいのでしょうか。

林業事業体が主体となったシカ管理体制の構築

林業事業体は、伐採や再造林、間伐など、森林の整備を担う法人または団体です。森林で日々作業を行っている林業事業

体は、地形や植生などの環境も熟知しており、シカが多い場所も把握しています。

そこで私たちは、捕獲従事者が対応できない地域を林業事業体が担う体制の構築を目指して、実施可能な方法や条件を検討しています。アクセスの悪い地域で継続して捕獲を実施するためには、作業の省力化が重要となります。そのため、遠隔通知システムを導入し、林業事業体の職員を中心にワナ捕獲を実施しました。

再造林地2カ所（捕獲区A・B）【写真3】において3カ月間捕獲を実施した結果、どちらも3頭捕獲できました。また、捕獲によるシカの生息密度低減効果を検証するために、捕獲区に加えて捕獲をしない対照区を設定し、捕獲前後に糞塊除去法による生息調査を実施しました【写真4】。

その結果、シカの推定生息密度は、対照区では変わりませんでした。捕獲区ではどちらも捕獲後に大幅に減少しました【図1】。このような捕獲の実施による生息密度低減効果の見える化は、林業事業体にとってもシカ管理に取り組むモチベーションを保つことにつながると考えられます。

豊かな森林を次世代へ引き継ぐために

日本の国土は、約7割を森林が占めています。この豊かな日本の森林を次世代へ引き継ぐためには、長期的な観点からシカの管理に取り組む必要があります。森



写真1 林縁の牧草地に出没しているシカの群れ



写真2 シカが高密度で生息する森林 下層植生がほとんど食べ尽くされている。

研究者の横顔

Q1. なぜ研究者に？

子どもの頃から動物が大好きで、犬や猫はもちろん、ウサギやハムスター、金魚にザリガニ、バツヤやダンゴムシまでいろんな動物を飼っていて、研究者というわけではなく動物に関わる仕事をしたいと思っていました。野生動物に興味を持ち始めた修士課程のときに、初めて参加した学会が「野生生物保護学会（現・「野生生物と社会」学会）」で、学会での発表を聞いて研究の面白さを知り研究者を志すようになりました。

Q2. 影響を受けた人など

修士課程修了後にいちど就職しましたが、野生動物の研究をしたくて仕事を辞めて博士課程に戻りました。大学院に戻ってからポストク時代まで、一緒に研究に取り組んだ仲間と過ごした時間が私の研究者としての原点です。

Q3. いまホットなマイテーマは？

野生動物の被害対策を進めるためには、物理的防除や捕獲方法に関する技術の開発といったアプローチだけでなく、どのように人が関わっていくのかといった社会的なアプローチが欠かせません。新しい画期的な技術を開発しても、それを使うのは人からです。とくに被害が増えている中山間地域は、人口の減少・高齢化も進み、あきらめムードが広がっています。あきらめることなく、野生動物と関わり続けるモチベーションを保つためには、どのような体制を作ればよいのかが今の研究テーマです。

Q4. 若い人たちへ

博士課程修了後、就職先が見つからず、しばらくアルバイトをしながら大学に籍を置かせてもらって細々と研究を続けていました。森林総研に採用が決まったとき、そのポストク時代にお世話になった故・小林毅先生に、シカの研究を続けられることになりましたと報告したところ、「願ひ続ければ、夢はかなうんですね！」とお返事をもらいました。今度は、私から皆さんにこの言葉を贈りたいと思います。自分の夢を信じて願ひ続けて、そしてかなえてください。



八代田 千鶴 Yayota Chizuru

関西支所



写真3 捕獲を実施した再造林地 周囲は防護柵が設置されている。



写真4 糞塊除去法によるシカの生息調査

50mラインの左右それぞれ2mの範囲内に落ちているシカの糞を全て除去し、一定期間後に同じ範囲内に落ちている糞塊数を数えて生息密度を推定する。

林を守り育てる役割を担う林業事業体が主体となり、森林でのシカ管理の一端を担う体制を構築することが、現在のシカ問題を解決する突破口になることを期待しています。

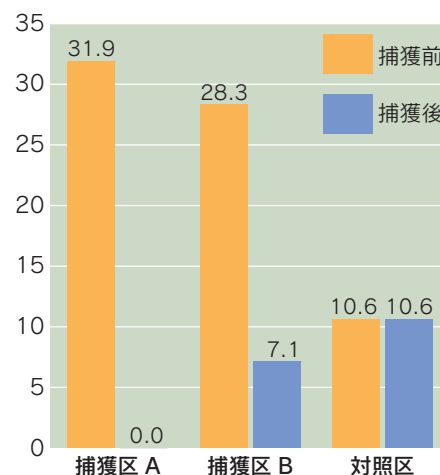


図1 シカの推定生息密度（頭/km²）